

「秦の始皇帝」と「漢の高祖劉邦」——「皇帝像」を考える——

齋藤道子

はじめに

今日はお足元の悪いところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。私は中国の古代史を専攻しておりますが、今日は「秦の始皇帝」と「漢の高祖劉邦」という中国古代史では大変有名な二人を取り上げます。どちらも皇帝であったことは共通ですが、実はこの二人それぞれの皇帝像はかなり異なっております。二人の皇帝像の検討を通して、中国の皇帝とは何なのかを、御一緒に考えることができればと思っております。

今日の私の話の目的は、繰り返して申し上げれば、「二

〇〇〇年以上にわたって中国国内に留まらず、東アジア世界全体の秩序構造の中心を担ってきた「中国皇帝」とはどのようなのかを、始皇帝と劉邦という二人の皇帝を通して考える」というものです。

東アジア世界全体の秩序構造を二〇〇〇年以上にわたって中心として支えてきたのが中国皇帝だと申しましたが、それは具体的にはどういうことでしょうか。例えば日本史を例にとってみましょう。御存じのように、日本の有力者・為政者は昔から中国に使いを送っております。今のところ確認できる一番古いものは、福岡の志賀島で見つかった金印が手がりです。あれは中国の後漢王朝（二五

（二二〇年）のときに、北九州の福岡地方の有力者が中国に使いを送って、その結果、当時の後漢王朝から「漢委奴国王」という金印をもらったものです。

それから、邪馬台国の卑弥呼が魏王朝（二二〇～二六五年）に使いを送ったことは有名ですが、その後も中国の南北朝時代に、南朝の諸王朝に「倭の五王」と呼ばれる日本の五人の王が使いを送っており、さらに六世紀から九世紀には遣隋使、遣唐使が派遣され、室町時代に入りますと中国の明王朝（一三六八～一六四四年）に足利義満らが使節を送っていました。

このように我々は、日本も歴史上何度も「中国に」使いを送った¹と言っておりませんが、実は正確にいいますとそれぞれの時代の「中国皇帝に」対しての使節です。福岡地方の有力者にしろ邪馬台国の卑弥呼にしろ、彼らは中国の皇帝に朝貢の使節を派遣したわけです。朝貢ですから、こちらからは貢ぎ物として産物等を持っていきます。それに対して中国の皇帝からは、使節を派遣したその為政者に対して中国の官職や爵位が与えられます。先ほど来お話ししております福岡地方の有力者や卑弥呼の場合は、「漢委奴国王」、あるいは「親魏倭王」という王号が与えられた

わけです。日本の為政者は、己の地位を中国皇帝からのこうした称号というお墨つきで確かなものとしていたわけです。さらにそればかりではなく、日本から持っていく貢ぎ物に比して何倍、いや何十倍という価値がある中国の物品が与えられます。それに加えて、例えば社会制度であったり、書物であったりという、国づくりには有益な知識や文化を手に入れることができます。

今、日本を例にしてお話しましたが、日本以外でも朝鮮半島の国々、あるいはそれ以外の東アジア・東北アジアの地域や国々も中国皇帝に使いを送り、地位を保証してもらったり、経済活動としては形式的には貿易であっても、実際は朝貢するほうに非常に利益のある物品賜与が行なわれ、それによって珍しい貴重な中国の物品や文物、さらに文化を分けてもらったりしてきました。その結果、中国皇帝を中心にして中国文化を共有する、いわゆる「東アジア世界」が形成され、政治的には中国皇帝を頂点とする秩序世界が形成されてきたわけです。中国皇帝を中心とするそうした体制を「冊封体制」と言ったりしますが、¹そうした体制でほぼ二〇〇年間、東アジアは歴史を刻んできたわけです。そのような体制の中心になっている中国皇帝

誕生

人質 ⇒ 太子

秦王

皇帝

死

図1 始皇帝の生涯概観

とは何か、どのような性格を持ったものかを改めて考えてみよう、というのが今日のお話です。

一 始皇帝と劉邦

さて、前置きが長くなりましたが、「始皇帝と劉邦」という話に入ろうと思います。始皇帝と劉邦という二人はほぼ同時代人ですが、極めて異なる環境で生まれ育っています。彼らそれぞれの生まれとか環境の違いが、実はその後の二人の皇帝像に直接影響しているということを、まずここで申し上げたいと思います。

では、始皇帝から始めましょう。

図1はごく簡単に彼の一生を年代を入れて示してみました。年代の数字は生年以外は『史記』六国年表によっています。後に始皇帝になるこの男性は、誕生が紀元前二五九年ごろと言われています。

誕生の場所は当然秦の国と思われるで

しょうが、実は秦とともに戦国七雄の一つであった趙という国の都（邯鄲）です。何故他国で生まれたのかと申しますと、彼の父親である秦の公子子楚は趙に人質となっており、そのため後の始皇帝（名前は政）はこの邯鄲という他国の都で生まれました。彼に関しては、実は中国史上で有名なスキャンダルがあります。彼の父親は秦の公子子楚（後の莊襄王）ということになっていますが、実はそうではなくて呂不韋という大商人ではないかというスキャンダルが昔から語られてきているのです。

そんなスキャンダルが生まれた背景は次のような事情です。公子子楚は趙の都の邯鄲で呂不韋という大商人と知合いになります。呂不韋は商人ですから、子楚という秦の公子を見て有名な「此の奇貨居くべし」（『史記』呂不韋列伝）、つまり「珍しい商品はしまっておいて、いざ値が上がるのを待つのがいいのだ」と言ったと伝えられています。この子楚はいずれ出世するようになるだろうから、彼に投資しておけば、いずれ自分にも利益として戻ってくるだろうということですから。そこで呂不韋は公子子楚にせつせと援助をし、さらに彼が秦に帰って次の王になれるよう、秦国内でも手段を講じます。そんな中、呂不韋が寵愛して

誕生

任侠的生活

下級役人

反乱

漢王

皇帝

図2 劉邦の生涯概観

いた女性を公子子楚が見て気に入ってしまい、呂不韋にその女性を譲ってくれと言います。呂不韋はこれも投資のうちだと思つて、女性を子楚に与えます。そこで生まれたのが後の始皇帝、つまり政という名の子供です。ですから、始皇帝の実の父親は秦の公子子楚なのか、あるいは呂不韋なのかというのが、スキャンダルとして昔から語られていますが、今となつてはどちらか分かりません。恐らく子楚の子供だとは思いますが、確かめようがありません。

そうしたいきさつを経て、政（後の始皇帝）は趙の都の邯鄲で生まれ、しばらくはそこで育ちます。やがて、子楚が呂不韋の援助もあつて秦に戻り、紀元前二四九年に王位につきます。それが秦の莊襄王です。それに伴つて、この邯鄲で生まれた政が太子になります。

莊襄王は即位してわずか三年ほどで死んでしまいます。それにもない紀元前二四

七年に、太子であった政が跡を継いで、秦王として即位します。彼は即位後、秦国の強力な軍事力を背景に近隣の国々を次々と侵略・占領していきます。そして、遂に紀元前二二一年、即位して二六年後に中国を統一します。そしてこれまでの「王」という称号を替えて「皇帝」と名乗るようになります。これが支配者としての「皇帝」の誕生です。その後、さまざまな統一策の実施や、万里の長城や阿房宮の建設などの大仕事を命ずるなどした後、紀元前二一〇年に五〇歳で亡くなります。これが大まかな彼の一生です。それに対して、今度は劉邦を見てみましょう。図2の年代の数字は生年以外は、『史記』「秦楚之際月表」と「漢興以来諸侯王年表」によっています。

始皇帝と劉邦とはほぼ同時代人だったと先ほど申しましたが、劉邦の生年といわれる紀元前二五六年にはクエスチョンマークをつけておられます。劉邦が生まれた年についてはいくつかの説がありまして、よく分かりません。これよりも十年ぐらい遅いという説もあつたりします。生年が定まりませんので、結局亡くなったときの年齢も諸説あり、六一歳ぐらいという説、五三歳ぐらいという説、さらにもっと若くして死んだという説もありません。⁽²⁾

劉邦は現在の江蘇省にある沛の農家に生まれました。彼の場合は、生年が定かでないことからもお分かりのように、その生家は歴史記録に残るような家ではないのです。そのため、父母の固有名詞も分かっておりません。父親は、『史記』などには、「太公」と出てきます。しかし、「太公」とは「おじいさん」あるいは「お父さん」という普通名詞です。また母親は「劉媪」と書かれていますが、「媪」はおばあさんのことです。ですから「劉媪」とは「劉ばあさん」ということです。つまり、父親にしろ母親にしろ、固有名詞が残っていない。普通農民階級の場合、歴史記録に固有名詞はほとんど残りませんので、劉邦の場合も両親の名前はよく分からないのです。

さらにその出生に関しては『史記』と『漢書』の高祖本紀には、劉邦の父親が外を歩いていたときに、大沢のほとりて昼寝をしている自分の妻（劉邦の母）の上に竜が乗っているところを見た。そして生まれた子供が劉邦だったというエピソードが書かれています。同じ史料が伝える、劉邦の顔が「龍顔」であったとか、左の股に七二個のほくろがあったという記述と同様、これは恐らく劉邦が皇帝になって以後に、彼が生まれからして普通の人間ではないこ

とを伝えるためにつくられた話とされます。

つまり彼は名も無い農家の出だったわけですが、では真面目に農業をやっていたかという点、およそ違ったようです。兄夫婦が一生懸命畑を耕しているのに、彼は任侠無頼の徒と交わり、若い者を集めては酒屋に入り浸り、そこでくだを巻いて氣勢を上げている。いわば親分肌といいますが、兄貴肌といいますが、そういうことで人に好かれるのですが、およそ兄夫婦から見ると、大変な穀潰しともいえる存在です。

やがてそのうちに沛の近くの泗水の亭長という下級の役人になります。劉邦が生まれ育った時代は秦帝国の時代ですから、つまり秦の治世で下級の役人になったわけです。

後でもまた申しますが、秦は始皇帝の死後たちどころに各地で反乱が起きます。その中で紀元前二〇九年に劉邦自身も周りに担ぎ上げられて、一リーダーとして秦を倒す反乱に参加することとなります。そして、紀元前二〇六年に「漢王」になります。この称号は何かといいますが、秦が倒れた後に項羽によって反乱のリーダーたちに領地が割り振られた結果、彼は漢（漢中）という大変な山奥の地方（今の陝西省南部）を領地としてもらい、そこで漢王と名乗

る事になりました。

漢王としての状態は足掛け五年続きます。このうちの四年間（紀元前二〇五〜紀元前二〇二年）が、これまた大変有名な項羽と劉邦の争い、いわゆる「楚漢戦争」の時期です。そこで項羽を紀元前二〇二年に破って、劉邦が中国の支配者となり、漢王でしたから彼がつくった王朝が「漢王朝」となって、彼は漢王朝の初代皇帝高祖になりました。その後、皇帝になってから十年もたたずに、紀元前一九五年に亡くなったという一生です。

今、ざっとお話ししましたように、二人の生まれと育てた環境が非常に違うことはお分かりいただいたことと申します。まず始皇帝は、父親はあるいは呂不韋だったとしても、とにかく秦の王族として趙の邯鄲で誕生しました。幼少期の邯鄲での生活は、人質の子供なのでやや不自由はあったかもしれませんが、帰国して父親が秦の王になってからは王族としての教養を身につけ、王族としての生活を送るという、支配者としての環境の中で成長してきたわけです。ですから、後に始皇帝となった政という若者は、いわゆる伝統的な支配者階級の出身として生まれ、そうした環境の中で育ちました。

一方、劉邦ですが、彼は沛という町の農民の家に誕生し、若いときから任侠無頼の徒と交わって、そのリーダー格でした。彼の人物論については、人を使うのがうまく、大変人好きがして気前がよい、親分肌というか兄貴肌である、結構自己中心的で、かつ感情的になって怒ったりはするが、一方非常に客観的に物事の状況判断ができて、ここでは感情をコントロールしたほうが良いと思えばうまく感情をコントロールできる、などさまざまなが言われております。⁽³⁾つまり彼は自分を非常に客観視できる人間だったらしくて、自分にできること、できないことをきちんと見きわめて、自分がこれは不得意だ、これはできないと思ったら、自分よりもその点ですぐれている人たちをどんどん積極的に採用する、そういう人間だったように思われます。そういう性格なので何となく周りに人が集まってくる。秦に対する反乱が周囲で起こったときも、押されて反秦勢力の一リーダーとして決起する、それが紀元前二〇九年です。そして、最終的に項羽との争いに勝利して漢王朝を建てることとなりました。

今までお話しして来ましたが、生まれも育ちも全く異なる始皇帝と劉邦という二人がともに皇帝になるわけ

すから、「皇帝」という称号は共通でも、何かそこには違いがあるのではなからうかという疑問はおのずと浮かんできます。

では次に、それぞれが体現した「皇帝」の中身の検討に入りましょう。まず始皇帝から始めることとします。

二 始皇帝(1) —— 「王」から「皇帝」へ ——

始皇帝が新たに支配者の称号として創設した「皇帝」とはどういう性質のものであったのでしょうか。そもそも、彼は紀元前二四七年に、父の莊襄王の跡を継いで秦王として即位しました。彼の支配者としての前半の称号「王」と後半の称号「皇帝」とでは、どこが異なっていたのでしょうか。それを考えるためには、まずそもそも「王」とは何か、いかなる性質を持っているものか、を明らかにすることが必要です。

後に始皇帝となる政が秦王となった前二四七年は、中国史の時代でいえば戦国時代といわれる時代です。紀元前四〇三年から紀元前二二一年までが戦国時代ですが、この時代には戦国七雄と呼ばれる大きな国が七つありました。その一つが秦の国です。こうした国々は、そもそもいつ、ど

うやってできた国なのでしょうか。それはずっと時代がさかのぼる周という時代にまで戻って考える必要があります。周王朝とは、古く紀元前一〇〇〇年ぐらいに成立した王朝です。

周は殷王朝に取って代わった王朝ですが、周の王は統治制度として自分の一族、あるいは周王朝の建国に力を尽くした家臣たちに、土地と爵位を与えて諸侯とし、国をつくらせるといいうゆる「封建制度」を採用しました。戦国時代の「戦国七雄」といわれる国々のほとんどが、周から封建された、あるいはそうした国から派生した国々です。秦も周から封建された国の一つですので、後の始皇帝である政が父の跡を継いで即位した秦王の「王」とは何かを、周代までさかのぼって確認させていただきます。

周王朝は先ほども申し上げましたが、紀元前一〇〇〇年ぐらいに成立した王朝です。現在の中華人民共和国の政府は、一九九六年から国家プロジェクトとして、周王朝と、その前にあった殷王朝、さらにその前にあった中国の一番古い王朝だと言われている夏という王朝、すなわち夏、殷、周の三つの王朝の成立が正確に何年だったのかを突きとめるといふプロジェクトを立ち上げました。その結果、現在

の中国の見解は、周王朝の成立は紀元前一〇四六年ということになっております。大体紀元前一〇〇〇年ぐらいと考えていただければよいと思います。紀元前一〇〇〇年ぐらいに成立した周王朝は、その前にあった殷王朝を武力で倒して成立しました。

そうなりますと、周王朝は殷王朝という前の王朝を武力で倒して、いわば下克上をやって成立したわけですから、非難を浴びかねません。そこで周王朝がうちだすのが「革命理論」です。我々は今普通に「産業革命」とか「情報革命」とか「何々革命」という言葉を使っていますが、もと「革命」という言葉は殷から周への交代を「殷周革命」と言ったのが最初です。そしてこれが、「王」とはそもそも何か、につながります。

革命理論によれば、本来この世を支配するのは、我々の頭の上に広がっている天です。ところが天は人間の言葉を話すことができませんから、直接人間社会を統治することができません。そこで、天は上から見ていて大変美徳があつて、性質がよくて、能力がある人間を探して、あれを自分の代理としてこの世界を治めさせようとする。その人間に、天が自分に代わつてこの世を治めろという命令を

下す。それが天の命、つまり天命です。天命が下った人が、天の代理として、この世界を支配するようになる。それが「王」であり「天子」です。この周の統治体制を概念化して図で示すと、図3のようになります。

周によれば、「自分たち周王朝は殷王朝を武力で倒したけれども、あれは自分たちが権力欲の果てに殷を倒したのではない。殷ももともとは天から命じられて王になっていた。ところが、天が上から殷王の政治を監督していると、紂王にいたつて悪政がはなだしくなる。そこで天は殷を見限つて、別の人間（周の文王）に天命を移したのだ」と

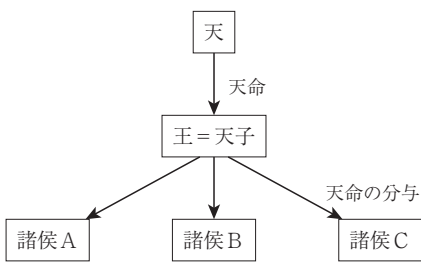


図3 周時代の王と諸侯の関係図

説明します。殷の最後の王となった紂王は、暴虐非道な王として、『史記』などを通してその悪名が後世まで伝わってきます。

天命が別の人間に移ることを「革命」といいます。「革命」の革という字は、「あらためる」という意味で、ですから「革命」を漢文的に読む

と「命を革む^{あつた}」となります。周は、殷王朝が徳を失ったために天から見放されて、天命が殷から離れ周に移った、つまり「革命」が起ったのであり、自分たちが好きこのんで殷王朝を武力で倒したのではない、という説明をしました。

つまり、周によれば、自分たちは天から命令されて王となった、そして王はイコール天子である、となります。そして、天命を受ける王、つまり天子は徳がある人間でなければならぬ、といえます。

ここで面白いのは、この「徳」です。我々は今「徳」と聞くと、道徳という専ら倫理的な正しさだけを徳と思いますが、実はこのころの徳は、思いやりや正直といったような倫理的な正しさだけではなく、同時に力も含まれます。つまり命令を聞かないとか、悪いことを行なう人間がいた場合、時によっては武力で正すのも徳だということです。単に倫理的な正しさだけではなく、力という意味も入っていたのです。ですから周の時代の徳という言葉には、現在で言う「徳」と「力」の二つの面が含まれていました。⁽⁴⁾

さらにこの時代の徳に関してもう一つの注意すべきことは、「徳」は姓によって異なることとされてきたことです。姓

が変われば徳も異なる、つまり力の種類が異なると考えられていて、天命は個人に下るだけではなく、その個人が属する血筋つまり姓に下ると考えられていました。特定の姓の一族に天命が下ると考えられたわけです。その姓が持っている徳を天が良しとしたわけですから、同じ姓を持つた一族全体に天命が下ると考えるわけです。

そうした天命と徳についての理解は、先ほどお話ししました周の封建制度にも影響を与えています。周王朝は自分の一族とか、周の建国に大変力を尽くした家臣を諸侯とし、領土と人民を与えて国をつくらせて、封建諸侯国ができました。こうした周王朝の採った統治策が「封建制度」です。封建制度という統治システムは中世ヨーロッパなどにも見られますが、周の封建制度だけの大きな特徴は、「諸侯は周と同姓」ということを原則とするということです。何故、諸侯は周王室と同姓であることが必要なのでしょう。それは、同姓であれば、周に下った天命が王を通じて諸侯にもいきわたるのです。つまり、諸侯の支配の正当性がここで確保されます。

ですから周と諸侯が同姓であることが大事であり、封建諸侯となった人のなかには姓が違う人々、つまり異姓だが

殷王朝を倒すのに力を尽くした人たちが結構いるわけです。そうした場合はどうするのかといえば、本当は同姓ではないのに擬制血縁関係によって同じ姓だとみなすという、あの意味かなり無理なことをやっているわけです。それほど何故同姓にこだわるのかというと、同じ姓でないと天命が行かないからです。天命が行かないと封建諸侯国の支配の正当性が認められないので、封建諸侯はみな周と同姓という説明で封建諸侯国をつくっていったわけです。

ちなみに、周王朝の姓は「姬」といって、我々にとって馴染み深い「お姫様」の「姬」という字です。「姬」という字が何故「お姫様」という身分の高い女性を意味することになったのかといえば、中国古代では女性の固有名詞はめったに記録に残らず、実家の姓で表現される場合が多いのです。ちなみに中国では昔から現在まで、夫婦別姓です。ですから「姬」という姓で書かれている女性は、周王朝もしくは周と同姓の諸侯の出身女性ですから身分が高い。そうなる、「姬」という字の就く女性は身分の高い人ですから、その意味だけが後まで残っているわけです。

では、こうして天命を受けた周王、つまり王とは何をするものなのでしょうか。現代の我々は政治支配者といえ、

法律をつくるということをまず考えたりしますが、中国古代の王は全く違います。では当時の王の任務とは一体何だったのでしょうか。

まず押さえるべきことは、中国は基本的に農業社会であるということです。農業は、現代のように科学技術が進んだ世でも天候の影響を大きく受ける産業です。今のようにな気予報があり、化学肥料などが盛んに使われるようになってさえ、自然の気候に大変左右されやすいのですから、これが今から三〇〇〇年も前となりますと人間は自然に全く抵抗できません。つまり人間は自然のなすがままという状態の中に置かれていることを想像いただきたいのです。

今の我々の社会から科学技術の結果であるものを全部消してみてください。そうすると、まずこの教室がなくなり、ます。天気予報などはもちろんありません。古代の人々は自然の中において、突然雲が出てきたなと思ったら大雨が降ってくる。これがいつやむのかも分からないし、大體何故雨が降るのかも分からないのです。すごい風が吹いてきて、風とは何なのか、何が原因でこんなに大気が激しく動くのかも分かりません。もちろん雷の鳴る原因などは分かりませんので、恐れおののくだけです。病氣も、さつ

きまで隣で元気にしていた人がばたりと倒れ死んでしまうかもしれません。そうしたときも何が原因なのかも分かりませんし、熱を出してがたがた震えていても治療方法もない。今ここで取上げている時代とはそういう時代であるということなのです。

そういう時代に天子として、王としての最高の任務は何かといいますと、季節がきちんと循環していくことを確保し、雨が降るべきときには雨が降り、暖かくなってくるべきときにはきちんと暖かくなってくる、つまり農業にとって一番基本的な、季節の順調な運行を確保するのが王としての最大の任務なのです。つまり自然の動きをきちんと整えることがすべての要であって、そうでないと人間が生きられないのです。

ではそのための手段は何でしょうか。今のような科学的知識が全く無く、自然に対してただただ受け身であった人間にとって、雨が降るとか、風が吹くとか、病気になるなどの原因は、すべて人間以外の力、つまり神様のしわざだと思っただけです。そうなるとうした不測の事態、人間にとって都合の悪い状態を回避するためには、そうした事態を引き起こす神様の機嫌をとる、あるいは神様の機嫌を損

ねないことが大切です。神様に機嫌よくしてもらい、雨の季節には雨を適当に降らせてもらう、また大風が吹かないようにとか、暖かくなるべき時期にはきちんと気温が上がっていくようにとか、とにかく祭り、祭祀を行なって神様をお願いをするわけです。つまりお祭りをするのが、当時にあつては自然の秩序維持の最高の手段です。今の我々からすると、古代の人々は何故あれほど祭りを真剣に、しかも頻繁にやるのかと思いますが、彼らにとっては秩序維持のための他の手段がないのです。

支配者の任務の本質が秩序の維持であることは、いつの時代でも変わらないと思います。その手段や何の秩序かという対象が異なるだけです。そうした中で、古代の支配者の最大の任務は自然の秩序の維持であり、その手段はお祭りをするとということなのです。その名残で政治のことを「まつりごと政」と今でも言うわけです。特に王は、天・地・季節、あるいは名山や大河といった中国全体にかかわるものを対象として、それらを祭祀するという手段によって、中国全体の自然秩序を維持する、それが王の最高の任務なのです。さらに王の任務として挙げられるものは、同じく秩序維持なのですが、「夷狄」と呼ばれた中国の周辺にいる、当

時の中国からみて「野蛮」とされていた人たちが攻め込んできたときに、軍隊を出して中国を守ることがあります。

つまり古代の支配者の任務は、祭祀と戦争という二つの手段によって、自然と人間による脅威を防ぎ、人々が安全に暮らせるよう、秩序を守っていくことです。

これに加えて、王の持つ徳を広く天下に及ぼして、天下の人間が正しい生活をするよう教化・徳化することも、天から与えられている任務と考えられていました。

王、同時に天子である人間の任務は、このようにまとめることができます。

一方、諸侯の任務を見てみましょう。彼ら封建諸侯は、周王から領土をもらって国を与えられた恩義があり、それに対する義務として貢納、つまり王への貢納があります。それは平常時は物品ですが、夷狄が攻めてきたときには、王からの命令に従い軍隊を出します。周王は諸侯の軍隊を集めて、夷狄に立ち向かうわけです。

さらに封建諸侯も自分の国内の自然秩序を維持する義務があり、やはり彼らも国内の山や川を祭ります。黄河のような圧倒的に大きな川や高い山の祭祀は天子が行ない、自分の国内の山や川は封建諸侯が祭ります。封建諸侯も、王

と同様に祭祀と戦争で秩序維持をはかるのが本来の任務です。

さらに一つ注意していただきたいことは、周王は天子です。すから常に天の監視のもとにあるとされたことです。天が上から見ているわけです。その結果、今の政治は自分の意に沿わない、今の政治は良くないと見ると、天は警告を発します。どういう形で警告を発するかといえますと、天界の異変、つまり日食とか月食、流れ星や、地震・洪水などの災害といった天変地異の形を取り、そうしたことが起こると、これは天子に対する天の警告だと当時の人は受け取っていました。そういう異常現象が起きると、王つまり天子は身を慎んで恭順の意や反省の意を示すわけです。ところがもしこうした警告にかかわらずなお政治を改めない場合には、天子すなわち王の場合には「革命」が起こり、政権が自分から離れていくということになります。つまり常に天から監督されているのが周の王でした。

さてこれまでお話ししてきた周王朝ですが、この王朝は紀元前三世紀までと歴史的には非常に長く続きました。しかし周王朝が王朝として力を持っていたのは、一応紀元前七七一年までです。紀元前七七一年に周王朝は遊牧民の攻

擊により、都を落とされて一度滅んでしまいました。翌年には都を、それまでの鎬京から洛邑に移してまた復活します。

鎬京は現在の陝西省にあった都市、移った先の洛邑は現在の河南省洛陽です。しかしこの後は王朝としての力は弱くなってしまい、封建諸侯が次第に命令を聞かなくなり、自立していくようになってしまいます。それで、歴史上の呼び方としては、都の位置によって、建国から紀元前七七一までの周を「西周」、紀元前七七〇年以後の周を「東周」と呼び、さらに東周時代は今申し上げたとおり周王朝の力はほとんど無くなってしまいますので、時代の呼び方も東周時代とはいわずに、春秋時代、さらに戦国時代といえます。

春秋時代は、紀元前七七〇年から紀元前四〇三年までです。紀元前四五三年までとする説もありますが、いずれにしてもこの時代になると、再三お話ししておりますように周王の力が弱まります。本来、周王は必要なら武力で秩序を維持してきたのですが、この時代には王としての任務ができなくなってしまうました。そこでどうしたかといいますと、封建諸侯の中の有力者が覇者と呼ばれて、その覇者が周王の代行という形で封建諸侯国間の揉め事の仲裁をした

り、あるいは夷狄が攻めて来た時には軍を集めて対応していました。

このように、この時代には実際には周王よりも力が強くなった国が沢山出てくるようになります。これらの多くはいずれもかつて周から封建された国々で、これは大体黄河の流域に多いのですが、これらの国々の諸侯たちは実際には周王以上の力を持っていても、周王に遠慮して決して王とは名乗りませんでした。例えば秦の殿様であれば秦侯としか言わない。例外は、周の支配範囲の外から出てきた長江流域の楚や呉や越といった国々で、こうした国では春秋時代から楚王とか呉王とか越王とかと名乗っていました。しかし、春秋時代の間はそれ以外の多くの国々は実力はあっても王とは名乗りませんでした。

次の戦国時代に入りますと状況は変わってきます。戦国時代は紀元前四〇三年から紀元前二二一年ですが、この時代になると、周王への遠慮が次第になくなります。有力な国々の支配者が、みずから天命を受けた、つまり周の王が受けたような天命を自分が受けたと言い出して王を名乗り始めます。秦でも先に述べた始皇帝の父親が莊襄王であつたように、王を名乗ります。かつて周王だけがやって

いた天や地の祭りを行う者も出てくるようになります。

ここまでの話で、王とは何かということが大体お分かりただければ幸いですが、つまり王とは同時に天子であり、徳が天に認められた存在で、その統治の本身は自然の秩序と人的秩序を維持するための祭祀と戦争であり、さらに民の教化・徳化ということになります。ではそれが始皇帝になるとどう変わったかという話に移りたいと思います。

三 始皇帝(2) —— 「始皇帝」の誕生 ——

いよいよ始皇帝の時代に入ります。後に始皇帝となった政は紀元前二四七年に秦王として即位しました。つまり彼が権力を握ったときはまだ王だったのです。従って秦王政は祭祀を行ない、必要があれば戦争を行なっていました。

彼が伝統的な王の姿を保っていたことは、例えば、彼の即位後に秦は次第に強くなって近隣の国々を滅ぼしていきませんが、彼は滅ぼした国に行き、その山川をお祭りしていいことからも分かります。つまり祭祀の実行者がこれまでの国から自分になりましたということを、それら山川の神々に知らせる必要があったのではないかと思われるのです。始皇帝というと、何か我々は伝統の破壊者のような感

じを持ちますが、彼も最初は伝統に則った「王」としてスタートしました。

彼が即位したのは一三歳の時であったといわれていますので、しばらくの間は実権を振るうこともありませんでしたが、やがて王として自立すると次第に秦は近隣の国を次々と滅ぼしていきます。東隣の韓を紀元前三三〇年に滅ぼし、紀元前三二五年には魏、紀元前三二三年には楚と、次から次と他の強国を滅ぼし、紀元前二二一年に、戦国七雄の中で一番東にあつて秦から最も遠かった斉を滅ぼして、全中国が秦によって統一されます。この紀元前二二一年が秦による統一がなつた年です。統一を完成した秦では、戦国時代の秦の都であつた咸陽（現在の陝西省）をそのまま都にします。

統一した後、最初に政が行なつたことは、家臣に命じて新たな支配者の称号を作ることでした。つまり自分は秦王として即位したが、他の諸国の王をみな滅ぼして統一を成し遂げた。自分は「王」を超える存在になつたので新たな支配者の称号を決めなければいけないというわけです。そこで家臣たちに新しい支配者の称号を諮問します。『史記』秦始皇本紀によりますと、家臣たちは、いにしえは

天皇、地皇、泰皇の三者が尊貴とされているが、なかでも最も尊いのは泰皇なので、泰皇がよいと上奏しましたが、政はそれに従わず、泰皇の泰を取り去り、代わりに帝字をつけて「皇帝」という称号に決定したといわれています。

ではここで決定された「皇帝」という称号は、そもそもどのような意味なのでしょう。西嶋定生氏によりますと、「皇」という字は「煌」字と同じく「光り輝く」とか「美しい」「偉大な」といった意味があり、「帝」は天界にいて宇宙の万物を主宰する絶対的な最高神である「上帝（天帝）」ということで、つまり「皇帝」とは「煌々たる上帝」つまり光り輝く絶対神という意味であるといわれています。⁽⁵⁾ここで重要なことは、皇帝がもはや人間ではなく神に近づいたというか、むしろ神そのものになってしまったということです。少なくとも政自身の中ではそう意識されていたはずですが。ここに到って、周以来の支配者像が変質してしまっただけです。つまり周の王は、さつきから何度も申し上げておられますように、常に天から良い政治が行なわれているか監視されている存在でした。ところが、皇帝は天の監視などは受けない、むしろ自分自身が天（神）そのものだということになったわけですね。

結局、皇帝と王ではどこがどう変わったのでしょうか。皇帝を基準としてその変化をまとめると次のようになります。

第一に、みずから上帝と等しい存在になり、天の監視下にある状態ではなくなりました。ただこれによって、皇帝にブレイキをかけるものがなくなってしまうという問題が新たに起こったことは注意しなければなりません。これまでは悪い政治をすると革命が起こり、権力者ではなくなるというブレイキがかかったのですが、そのブレイキがなくなってしまう、皇帝を規制するものが何もなくなくなってしまうのです。これは大変な問題です。

皇帝と王との違いの第二は、自分は他の人間とは違う別格であることを示すために、皇帝専用の言葉を決めたりしました。例えば、有名なものとしては、自分のことを指す語としての「朕」を皇帝専用にしてしまったことがあります。私という意味の朕という言葉は以前からあって、これまでは普通に使われていたのですが、このときから皇帝の専用語ということになりました。さらに「詔」という語は皇帝の命令であり、ほかの人の出す命令にはこの語を使用してはいけないことになりました。

さらに皇帝と王との違いの第三は、おくり名(諡)という制度をやめたことがあります。おくり名とは何かといいますと、皆さんは漢の武帝という名前の皇帝を御存じだと思いますが、漢の武帝とか周の文王とか、この「武帝」や「文王」は生前はそのような名前はありませんでした。つまり、その支配者の死後に、子供や家臣が、父親あるいは王、皇帝はどのような政治をしたか、どのような功績を上げたかで、それを表すふさわしい名前をおくるわけです。例えば、漢の武帝の場合は、戦争に強く、積極的に領土を広げたので武帝というおくり名で死後呼ばれるようになりました。

おくり名の制度はこれまで続いてきたのですが、始皇帝はこれをやめてしまいました。なぜかという、子供や家臣が神に等しい皇帝についてあれやこれやと評価するのはけしからん、ということです。従っておくり名の制度はやめになります。ただそうはいっても死後にどの皇帝のことか分からないのは困りますので、価値評価を含まない表現形として数で呼ぶことになりました。つまり政は最初の皇帝だから死後には始皇帝と呼ばれ、その後二世、三世と永遠に続く事になります。ですから始皇帝が生きているときは、

まだ始皇帝ではなくただ皇帝と呼ばれただけなのですが、死んでから彼は始皇帝、つまり最初の皇帝と言われるようになったのです。ですから、とにかく他の人間が支配者である皇帝を評価することは絶対に認められないのです。

このように、絶対的な支配者、他とは別格の存在としての「皇帝」が誕生しました。

さらに、始皇帝の行なったこととして、「中国内の秩序の再建」ともいえる諸政策があります。まず、いわゆる統一策といわれるさまざまなものの一統一です。例えば度量衡の統一があります。これを示す実物資料としては、例えば度量衡統一の詔の文字が入った青銅の杵の標準器が、一九八二年に発見されたりしています。容量としては九八〇cc入るようです。また文字の統一も行なわれました。これまで戦国七雄の国々では、さまざまな書体の文字が使われていましたが、小篆体という秦が使っていた書体に統一します。さらに車軌の統一といって車の幅も統一しました。何故車の幅を統一するのかとお思いかもありませんが、当時はもちろん舗装道路ではありませんので、車が通るとどうしてもわだちの跡がつきます。すると、当時は馬車の製作技術もまだ低いので車輪が壊れやすいのです。さらに軍隊

が急いで出動するときにも、車輪の幅を同じにしておけば、そこに車輪をはめ込んでしまえば、ちょうど電車の線路とは凹凸を逆にしたような具合で溝の中を一直線に行けるようになります。そういうことで車軌という車の幅の統一も行ないました。

これらに加え、新たな中国という空間に夷狄が入ってこないように万里の長城をつくり、さらには上帝の天の宮廟に対応する形で信宮（極廟）を造営し、皇帝の住まいとして阿房宮などの宮殿施設の建築を始めました。

今お話ししました諸々の統一策や、万里の長城・信宮（極廟）・阿房宮の建設などの大土木工事は、必ずしも皇帝と王との違いを直接的に表すものとはいえないかもしれませんが、しかし黄河流域を中心とした周王朝の支配範囲、さらには戦国七雄各国の支配範囲をはるかに超えて、中国全土をその支配下に置いた皇帝による新たな中国空間全体の整備が行なわれ、さらに自らを上帝に重ねることをその宮殿配置においても示そうとしました。こうしたことは、これまでの王にはなしえなかったことといえます。

始皇帝はこのようにこれまでの王と非常に違う支配者になりました。繰り返すならば、これまでの王との最大の違

いは、天の監視がなくなってまさに自ら上帝と等しい絶対君主となったことでしょう。これは彼が伝統的な支配者の家、つまり秦の王家の中で育ってきて、王の立場を重々理解していただけに、そのような何人もの王を自分は破った、自分はそうした王を超えたのだという自意識が非常に強かったためとも考えられます。そのために王を超える新しい支配者像を模索したのではないかと思われます。⁶⁾

こうして新たな支配者、皇帝が誕生した訳ですが、この始皇帝によって創作された「皇帝」像は、この形のままでは後世まで伝わりませんでした。次に劉邦が漢王朝を開いて皇帝になると、秦の皇帝像の修正が図られていきます。そして以後二〇〇〇年にわたって続く「中国皇帝」像が我々の目の前に現れてきます。では次に、劉邦によって始められる漢王朝の皇帝像に話を移しましょう。

四 皇帝劉邦(1) —— 劉邦政権の成立 ——

始皇帝がつくり上げた皇帝像は、漢王朝以後にはそのままの形では引き継がれませんでした。それは秦の皇帝像に問題があったということですが、その問題とは何なのか、どのように皇帝像が変わっていくのか、これからそれを考

えていきますが、まず始皇帝の死から劉邦による漢王朝成立への流れを追ってみましょう。

始皇帝の死は紀元前二一〇年です。始皇帝の遺体は、都の咸陽の東にそびえる驪山の麓に生前から建設していたいわゆる驪山陵に埋葬されます。今も地上にそびえている高さ約七〇メートルの墳丘の下には、『史記』秦始皇本紀によれば、地下宮殿ともいえる壮大な墓室が作られたといわれます。今のところ、中国政府はボーリング調査をやってはおりませんが、本格的な発掘がいつになるのかはまだ決まっていないようで、大分先になるかもしれません。

地上にそびえるこの墳丘が始皇帝の墓であることだけは昔から分かっていたのですが、一九七〇年代から有名な兵馬俑坑などの附属施設が続々と発見されるようになり、全体として複数の大規模な附属施設を伴った巨大な陵苑だったことが明らかになりました。

地上の権力をすべて掌握した始皇帝が、死という問題だけはどうにもならず、不老長寿の薬を必死に探したことは大変有名な話です。徐福あるいは徐市と文献によって漢字が違うのですが、そういう名前の方士を東の海に不老不死の薬を探すために派遣したりしました。その徐福が日本

に来たという伝説もあり、現に和歌山県には徐福の墓もあります。そのように不老長寿に憧れ、必死に手を尽くしましたが、人間である以上死を免れることはできず、遂に紀元前二一〇年に始皇帝は亡くなります。

始皇帝が亡くなると、翌年の紀元前二〇九年には反乱が各地で起り始めます。最も早かったのが、陳勝と呉広という二人の農民をリーダーとする反乱です。陳勝は陳渉と書かれる場合もありますが、勝が名前、渉は元服の時につける呼び名である字あざなです。紀元前二〇九年七月に起こったこの反乱が、中国史上最初の農民反乱であり、さらにこの反乱が一連の反秦勢力挙兵の先駆けとなったという点で、その歴史的意義は非常に大きいといえます。「王侯将相寧いずくんぞ種有らんや」という有名な言葉はこの時の陳勝の言葉です。この乱自体はわずか半年で鎮圧されますが、彼らの挙兵を皮切りに、楚の出身の項梁と項羽、さらに劉邦という人たちが反乱に立ち上がり、中国国内が反乱の渦の中に巻き込まれていきます。

秦が始皇帝の死後どういう形で滅亡したかといえますと、始皇帝の後に二世皇帝が位につきました。ところが、この二世皇帝は『史記』などによると凡庸な君主であって、お

よそ父親のようなカリスマ性もなく、彼の即位のために暗躍したといわれる宦官の趙高の言いなりになって、情報からも遮断されていました。そうしている間に国中に反乱が広がり、ついに二世皇帝を操っていた趙高もこのままではどうにもならないと思ったのでしょうか、紀元前二〇七年に二世皇帝を自殺に追い込みます。

その後、趙高は二世皇帝の兄の子供の子嬰を位につけます。ただこの子嬰はもはや皇帝とは名乗っていません。この時にはすでにかつて秦に滅ぼされた国々も再興の動きを示しており、もはや統一状態とはいえないので、子嬰は秦王として即位します。そしてこの子嬰が、紀元前二〇六年にまず劉邦に降伏し、さらに項羽によって殺されたことで秦は滅亡します。

このように秦は反乱の渦の中で滅亡していったわけですが、この後が有名な項羽と劉邦の争いになります。秦に対する反乱は各地で起こりましたが、その中で一番力があつたのが戦国時代の大国だった楚の將軍の家柄出身の項羽です。秦滅亡後、その項羽の主導によって反乱軍の各リーダーや秦の將軍で降伏した者など一八人が各地に分封されて王となりました。この時劉邦は、はじめにもお話ししま

したように、漢という地方の王に封ぜられます。漢とは漢中の地で、現在の陝西省南部ですが、僻遠の山岳地帯です。劉邦は、一度は漢王になってこの地に行きますが、しかし彼はここに留まることなく、間もなく北上して、かつての秦の中心地であった関中を占拠します。これは項羽の裁定に反することですので、ここから項羽との死闘を繰り返すこととなります。紀元前二〇五年から紀元前二〇二年までの二人の争いが「楚漢戦争」と呼ばれるのは、項羽がかつての楚國の將軍の家柄の出、つまり楚の人間、一方の劉邦が漢王だったためです。

この楚漢戦争は、はじめのうちはすぐれた軍人であった項羽に圧倒的に有利に進みましたが、最終的に勝利を収めたのはなんと劉邦でした。何故項羽ではなく劉邦が勝つたのかは、昔から多くの人の興味を引いてきました。両者の人材の使い方によるなど、現代でも雑誌で取上げられたりして大きな関心を持たれている問題ですが、きょうはその話ではありませんので、そこには立ち入らないことと致します。

紀元前二〇二年、劉邦が最終的に勝利して漢王朝が成立します。都は長安、現在の陝西省西安ですが、ここに置か

れます。長安は、渭水を挟んで秦の都であった咸陽の南側に作られた都市で、そこが漢王朝の都になります。そして、劉邦は他の王たちに押されるかたちで漢の初代皇帝になります。

五 皇帝劉邦(2) ——「漢の皇帝」の誕生——

今お話したようないきさつを経て、劉邦が漢の皇帝に即位したわけですが、彼の即位時には、二つの大きな懸案事項がありました。

第一は、劉邦個人の「権威」の無さです。これは彼の生まれ育ちから来ることですが、最初にお話ししましたように、劉邦は農民階級の出で、伝統的な支配者階級の家柄の出身ではありません。そのため、伝統に関する知識や、支配者としての礼儀、振る舞い、身の処し方といった、支配者階級に育てば自然に身につく、周りに自然と敬意を感じさせるような雰囲気、簡単に言うところと威厳とか権威がありませんでした。さらに、彼を取り巻いている人々、その中には反乱に立ち上がる以前の仲間や、反乱の途中からずっと彼を支えてきた人たちが多いのですが、そうした人々の出身やもとの職業を見ると、秦の下級官吏だっ

た人も一部はいるのですが、野犬の捕獲を業にしていた人や、葬式のときに音楽を演奏する仕事をしてきた人など多種多様でした。皇帝になった劉邦自身が決して行儀の良い人物ではなく、おのずと周りを圧するような威厳、権威がありません。これは大臣になった昔からのなじみの人たちも同じで、つまり漢の宮廷には、宮廷らしい秩序や荘厳な雰囲気、全くといってよいほどない状態でした。

そこが、支配者階級の中で生まれ育った始皇帝とは完全に違っていたと思います。そのために、劉邦にとつての第一の懸案事項は、こうした血統的な権威がありませんので、権威を自分でつくらなければいけないということでした。

漢王朝の宮廷にふさわしい、宮廷としての権威、秩序、雰囲気、そして皇帝というものの尊厳性を皆が感じる、そうしたものを人為的に作りあげるといふ課題がありました。

もう一つの課題は、秦の轍を踏まないようにすることです。何故秦はあれほど簡単に滅んでしまったのか。苦勞して支配者になった劉邦にしてみれば、それこそ命がけの苦勞をして手に入れた漢王朝の皇帝の位を、あのよう簡単に失ってしまったのはたまらないわけです。つまり反面教師として秦を見て、秦の何が悪かったのかという滅亡

の原因を考え、探って、それに対する対策を打たなければいけないという課題がありました。この二つが新たに皇帝になった劉邦の前に立ちはだかった課題です。

この二つの課題に対して、劉邦はどのように対処したのでしょうか。

まず第一の権威の創出ですが、ここで活躍したのが儒家の叔孫通しゅくそんつうという人物です。儒家は諸子百家の一つで、孔子に始まる学派です。儒家思想は、私にはとてもその全体像を語る力はありませんが、社会の秩序を保つには、それぞれの立場の人間が、それにふさわしい目に見える形、いわゆる礼に則った行動をするべきと主張します。相手を敬っていると、相手が自分よりも上位だと思うときには、そうした気持ちを中心の中で思うだけではなく、それを行動として表現しなければなりません。年齢差や身分による貴賤の別、そうした人間相互の関係は、各人がおのれの立場として採るべき行動、いわゆる礼を行なうことにより、関係性が目に見える形をとる必要があるとします。従って日常的な個人の行動だけでなく、儀式をも非常に重視します。つまり儒家は、形式や人間の行為を非常に重視します。

もともと劉邦は、非常に儒家を嫌っていたと言われています。今までお話ししてきた劉邦の育ちや性格でお分かりのように、劉邦はおよそ儒家の人々のお眼鏡にかなうような行動・振る舞いのできる人ではありません。ですから形式にこだわる儒家と反りが合わないのは当然ともいえます。

ところが、いざ自分が皇帝になると、自分の宮廷のあまりの無秩序ぶりにさすがに閉口してしまったといわれます。『史記』の叔孫通伝によりますと、劉邦の朝廷は、酒を飲むと臣下たちは口論をしたり、酔っ払ってわけの分からぬことを怒鳴ったり、剣で柱に切りつけるなど、目に余る状態であったといえます。これでは皇帝の権威も威厳もあつたものではなく、さすがの劉邦も困ってしまいます。

この時に名乗りを上げたのが叔孫通です。彼は、儒家は国を攻め取ることは苦手だが、出来上がった秩序を守り保つことは得意だとして、漢の朝廷での儀礼の制定を願います。劉邦の許可を得て、彼は他の学者や弟子たちと儀式を制定し、練習を重ね、遂に紀元前二〇〇年の朝会るときにその儀式が披露されました。皇帝を至尊の存在として繰り上げられる壮大な儀式が終わった時、劉邦自身が、自分は今日初めて皇帝の貴さがわかった、と述べたといわれま

す。そして叔孫通を宗廟の祭祀儀礼担当の太常という高位に任命します。つまりこれによって、初めて皇帝劉邦を中心とする漢の宮廷の秩序が整うこととなります。こうして、漢の第一の課題であった、皇帝劉邦を人為的に權威付けなければならぬ、ということが一応解決されました。

さてここで注意していただきたいのは、これによって儒家という学派が漢の朝廷に接近した、ということですが、つまり、劉邦はもともと儒家嫌いだっただけですが、こういうことがあって儒家の使い道といえますか、利用価値に目覚めるわけです。これ以後、漢の朝廷へ儒家がだんだんと接近・進出していき、やがて劉邦から五、六十年後の有名な武帝という皇帝のときに儒家が国教、国の学問となる道が開かれていきます。そして漢以後も国教としての儒家、日本では儒教という呼び方が普通ですが、この儒家の地位は歴代王朝を経ても変わらず、二〇世紀の清朝の滅亡まで、中国の支配思想としての地位は揺るぎませんでした。その状況の第一歩がここから始まったといえます。農民階級出身の劉邦だからこそ、人為的に皇帝の權威を演出しなければならず、それができたのが儒家です。ですから、中国といえば儒教・儒学という我々に馴染み深い結びつきは、劉

邦が皇帝になったことと切っても切れない関係にあったといえましょう。とにかく、劉邦は儒家を採用して演出家として、皇帝の權威を作りあげていきました。

さて漢のもう一つの課題は、秦の轍を踏まないようにということですが、秦の轍、つまり秦が短命で終わったその問題点として大きく三点が挙げられると思います。

まず一点目は、何といっても法律が煩瑣で厳し過ぎたことがあります。秦は法家思想に則っていましたが、法律が厳しく、法律に背くと情状酌量などは一切なしで処罰されたという話は有名です。しかし実は、実際の秦の法律の種類や条文という具体的なことは『史記』を初めとする歴史書にも記載はありません。ただ、前にお話ししました陳勝と呉広が秦への反乱に立ち上がるきっかけになったのも、大雨のために所定の期日までに指定地に到着できないことが明らかになり、このままでは死罪になる、どうせ死ぬならばと反乱に立ち上がったという有名な話などから、とにかく法律が厳しかったとだけ言われていました。

ところが近年、考古学の成果により、新しい資料が次々と発見されるようになり、具体的な秦の法律が今ではかなり分かるようになってきています。一つの例として、一九

七五年に中国の長江中流域の湖北省から発見された「雲夢睡虎地秦簡」というものがあります。雲夢は湖北省にある地名で、その秦代の墓から竹簡という文字を書いた竹の札が大量に出てきました。その中のかんりの部分が、秦の法律の具体的な条文でした。

この秦簡の発見によつて、初めて我々は秦の具体的な法律の条文の一部を知ることができたのですが、さらにその後、また別の新しい発見もあつて、秦の法律がなるほど大変煩瑣だったことが具体的によくわかるようになりつつあります。

例えば「雲夢睡虎地秦簡」で見ますと、地方官に対して、毎年、穀物の生育状況とか、雨量とか、暴風雨、水害などの状況を八月末までにきちんと報告せよと命ずるものがあります。それをもとにしてこの年の収穫予定を立てたのではないかと言われていますが、八月の末までに確実に報告書が届けられるよう、都との距離によつてどういう方法で届けるか、その届け方まできちんと決まっています。

また兵隊を訓練するのに、軍事教練の不徹底で、いつまでたつても弓が当たらない、あるいは馬の調教がなかなか進まないとなると、厳しい罰が具体的に書かれています。

とにかく事細かにいろいろな法律が決まつていて、なるほど、これでは当時は大変だったろうなと感覚的にも分かります。⁽⁷⁾

さて、そうした煩瑣で厳しい法律、それが結局、始皇帝の死後ただちに各地で反乱が起こった大きな原因だと言われているのに加え、劉邦自身が秦の法の過酷さを身もつて知っていることもあり、秦の法律に手をつけたのは実は皇帝になる以前に遡ります。劉邦が秦末の反乱の渦の中、反乱諸勢力の中で真っ先に秦の都のある関中に進入します。そのときにその地の父老と呼ばれる主だった年寄りを集めて、法は三章のみ、つまり殺人と傷害と窃盜の三つだけを罰するものとし、それ以外の秦の法は廃止すると宣言します。

漢成成後しばらくは、社会の疲弊に加えて、思想的にも老子や莊子などのいわゆる道家という無為自然を尊ぶ学派の思想が有力で、そのため積極的な政策、つまり戦争とか新しい政策は採らずに人民の生活を安定させることを第一としたために、法律はしばらく簡素なままとなりました。こうして秦の轍の第一の「煩瑣で厳しすぎる法律」に対し、その簡素化につとめました。

さらに漢からみて秦の問題点、つまり秦の轍の第二は、秦に対する反乱が起こったときに、真剣に秦のために戦うものが多くなかったという点です。秦は皇帝だけは絶対者として特別な者となりましたが、皇帝の身内、つまり兄弟や親戚といった人たちをほとんど重用も優遇もしませんでした。秦の前の周代は、すでにお話ししましたように封建制を敷き、王族であれば、土地をもらって諸侯になり、それなりに待遇されていましたので、一旦王朝に事が起きると、諸侯たちは軍を率いて都に駆けつけました。ところが秦は、全国統一後も郡県制という統治制度をしき、皇帝だけが全土の唯一絶対の支配者となり、王というものを一切つくりませんでしたので、いざというときの救援者がいないということになったわけです。

結局、身内を重用、優遇しなかったことが、反乱に対しても秦のために働く者が少なかった、つまり秦を短命に終わらせた一つの原因ではないかということで、劉邦は一族や功臣を王として領土を与え、国を作らせませす。王室にとって重要なところは直轄領として郡県制を採りますが、地方は一族や手柄を立てた功臣を王にするという封建制を復活しました。このような郡県制と封建制が並存する統治

制度は歴史的には郡国制度と言われます。

ここまでお話ししました、法律を簡素にし、一族・功臣を王とする封建制度を一部取り入れたいわゆる郡国制度の採用は、やがて漢王朝が成立して五〇年、六〇年とたつてくると次第に様子は変わっていきますが、漢の成立当初は秦の失敗をくり返さないように、こうした政策を採りました。そしてこの時点で、秦の皇帝との違いがすでに一つ出ています。それは、秦では皇帝のみが全国唯一の絶対的支配者でしたが、漢では皇帝の下に郡国の王がいるという、いわば皇帝は唯一の支配者ではなく、王の上位に君臨する最高の支配者という性質になったということです。

これはさらに秦の第三の轍としての、秦の皇帝は絶対者であり、神と等しい存在であるために、皇帝のやることにブレーキがかからないという問題点と関わってきます。皇帝の行なうことを誰も止められない、これは非常に危ういことであり、この危険性は周りの儒者たちにより強く感じられたように思われます。

この危険に対して儒者は、周の支配者像、つまり徳のある者に天命が下って、天の代理としてこの世を治めるといふ天子像を復活させます。つまり、皇帝という称号は残し

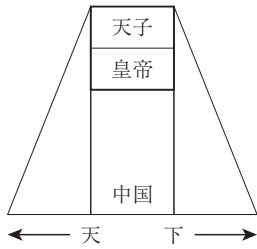


図4 漢の皇帝像のイメージ

ますが、そこに周代の天子としての一面を加えます。つまり一人の人間の中に、皇帝と天子という二つの面が共存する新しい皇帝像がここに成立することになるわけです。周の天子像が復活した背景には、周で天子の下に諸侯が存在した形に近い、漢初の郡国制で皇帝の下に王が存在する形ができていたことが、あるいは一つのやりやすさとして作用したかもしれません。

そのイメージを図示すればこの図4のようになります。つまり皇帝としては中国国内を絶対者として統治します。

一方天子としては、有徳で、天下の民を教化しなければなりません。そして大変重要なことは、天意に沿わないと革命が起きるという思想が復活したことです。始皇帝によって作り出された皇帝像は、何ものにもブレーキをかけるこ

とを許さない絶対者でしたが、漢の皇帝像はこうして「天子」の一面を持つことで、天子の監督の下にあるものに変質したのです。

さらに、漢の皇帝が天子の面を持ったことは、ひとり中

国のみならず、日本や朝鮮などの中国周辺諸国に非常に大きな意味を持つこととなります。図にありますように、天子が責任を持つ空間範囲はどこまでかといえますと、天の代理ですから空の下全部、つまり天下すべてです。中国は天下の一部に過ぎません。その周りには、日本や朝鮮半島さらにベトナムといった地域が広がっています。もちろんこのころの天下という概念は、現在のような地理的知識はありませんので、今から見れば非常に狭い範囲だったでしょう。中国に朝貢にやってくる国々とそうした国から噂で聞くその周辺ぐらいだったかもしれません。しかし中国の皇帝は、天子としてこの天下に広がっている中国以外の諸国や民をも教化する責任があったのです。

そのため、例えば日本が中国に使いを送っても絶対に拒絶されることはありません。天子である中国皇帝は、朝貢使節を歓待し、中国の爵位や官職をその為政者に与え、朝貢品への見返りに多くの価値のある物品や書物などの中国文化を惜しむことなく与えます。日本が遣隋使や遣唐使の派遣によって中国の文物や制度を輸入できたのは、皇帝が「天子」でもあるということによるのです。これによって、東アジアに中国文化を共有し、中国の身分・爵位を持つ為

政者の国々ができていきます。中国を政治的中心とし、中国文化を共有する東アジア世界、中国の冊封体制がこの時期から生まれることとなります。秦漢帝国の出現によって(8)はじめて東アジア世界というものが形成された、という指(8)的はまさしくそのとおりといえるのです。

一人の人間が、「皇帝」としては中国国内の絶対者として中国を統治し、「天子」としては天の監督下に天下の民を徳化し教化するという、この役割分担はいつごろから定着したのでしょうか。これは結構難しい問題です。儒家思想の影響で君主の地位は天から与えられたとする考えが、劉邦の子供で漢の五代目の皇帝となった文帝によって述べられたことは史料上確認できますが、儒家思想を背景にこうした「皇帝が同時に天子である」という見方が社会的に定着するのは前漢の終わりごろといわれます(9)。前漢という言葉が突然使いましたが、漢王朝は実はとても長期間続いた王朝で、劉邦が即位してから約四〇〇年も続きます。しかしその間に短い中断が入りましたので、そこで普通その中断の前を前漢、中断後に再興した漢を後漢と言って区別します。前漢は紀元前二〇二年から紀元後八年まで、後漢は紀元後の二五年から二二〇年までです。

表1 「周王」・「秦の皇帝」・「漢以降の皇帝」の比較

	天子の性格	革命	天地の祭祀の主催	国内外への二面性
周王	有	有	有	無
秦の皇帝	無	無	事例極少	無
漢以降の皇帝	有	有	有	有

皇帝が同時に天子でもあるとされたことの後世への影響は非常に大きなものでした。「秦の皇帝」と「漢以降の皇帝」と、さらに参考のために「周王」の三者の性格を比較のために簡単にまとめると表1のようになります。

この表から読み取れることを見てみましょう。まず漢以降の皇帝に天子の性質が付け加えられたことにより、皇帝の行為には天の監視というブレーキがかかりました。つまり、悪政が続くと革命になるという革命思想が復活したわけです。この後、中国は次から次と、二〇世紀に滅んだ中国最後の王朝の清朝まで王朝交代が続きますが、王朝交代は革命理論で説明されることとなりました。結局前の王朝が悪かったから天命が自分たちに来たのだという、この後

の王朝交代の正当化の理論がここで準備されることになったのです。

それから、天地の祭祀を主催するという支配者像は、周の天子にはありましたが、漢で明確に復活します。

さらに、国の内外への天子と皇帝の二面性による役割分担はといえば、周王は王(天子)でしかありませんから役割分担もありませんし、秦の皇帝は中国以外には支配関係を持ってませんので、これも役割分担はありません。漢以降の皇帝になったときに、初めて天子と皇帝のこういう役割分担、使い分けができるようになりました。中国国内に対しては皇帝は絶対君主として支配しますが、周圉の朝貢国には天子として王号などの爵位を与えて中国との政治関係を構築する冊封体制を築きます。さらに天子としての責務から、周辺の国々や民族が中国の文化や制度を学ぶことを拒否することはありません。こうしていわゆる「東アジア世界」が成立できる条件が整ったのです。

我々は中国皇帝というと、始皇帝のときに中国の皇帝像ができたのではないかと思いがちです。確かに皇帝という名前を使い始めたのは始皇帝ですが、我々になじみ深いといえますか、日本歴史と大きな関係をもつ中国皇帝像のス

タイトルは、実は劉邦という人物が皇帝になったことをきっかけとして初めてでき上がったのです。ですから、歴史にもしもということは許されないかもしれませんが、農民階級出身の劉邦が皇帝になっていなかったら、中国の皇帝像はかなり違ったものになっていた可能性があるので。

おわりに

秦と漢という二つの王朝は、中国の歴史の中でも非常に有名な王朝です。例えば秦が英語で中国を意味するチャイナ(China)という言葉の語源になっていたり、漢字とか漢民族とか、我々が中国をイメージする「漢」はもちろんこの漢王朝に起源するわけです。秦と漢が後々まで国名の語源になり、あるいは中国をイメージする言葉になったりしているのは、秦と漢というこの二つの王朝が中国史の中でも周辺にまで名を知られた強大な王朝であるということです。この二つの王朝が中国史全体の中でどれほど重要で大きな意味を持った王朝であったのかということは、これまでお話ししてきた皇帝像の面からもある程度お分かりいただけたかと思えます。

この時代を扱った本は研究書から一般的概説書、さらに

この時代を舞台とした小説など、沢山ありますので、図書館でもご覧いただきやすいかと思います。もし御関心をお持ちいただけましたら、是非図書館で関連図書をお探しいただければと思います。

話が雑駁で、またお聞き苦しい点が多々あったかと思いますが、最後までお聞きいただきましてありがとうございます。また、最後までお聞き苦しい点が多々あったかと思いましたが、最後までお聞きいただきましてありがとうございます。

〔付記〕 本稿は、二〇一五年五月九日、大阪経済大学日本経済史研究所主催、黒正塾 第一三回春季歴史講演会「秦の始皇帝」と「漢の高祖劉邦」―「皇帝像」を考える―での講演内容に加除訂正をしたものである。

- (1) 中国による冊封体制については、西嶋定生『日本歴史の国際環境』（東京大学出版会、一九八五年）序章の特に四―一頁が参考となる。
- (2) 劉邦の生年に関しては、佐竹靖彦『劉邦』（中央公論新社、二〇〇五年）五三―五七頁参照。
- (3) 劉邦の性格、特に項羽との対比から論じたものとしては、佐竹靖彦注(2)書、同氏『項羽』（中央公論新社、二〇一〇年）、藤田勝久『項羽と劉邦の時代 秦漢帝国興亡史』（講談社選書メチエ、二〇〇六年）等参照。

(4) 小倉芳彦「『左伝』における覇と徳―「徳」概念の形成と展開―」（同氏著『中国古代政治思想研究―左伝』研究ノート）青木書店、一九七〇年。のち『小倉芳彦著作選Ⅲ 春秋左氏伝研究』論創社、二〇〇三年に再録）六七頁では、西周時代の徳は後世のような「刑」と分離した概念ではなく、「刑」と「徳」を包括した一定の行動様式を支える心的状態と解している。

(5) 西嶋定生『秦漢帝国 中国古代帝国の興亡』（講談社学術文庫、一九九七年）四七―四八頁。

(6) 始皇帝の人物像については多くの参考になる書があるが、鶴間和幸『人間・始皇帝』（岩波新書、二〇一五年）は、七〇年代以後の新資料を用いて同時代の視点から始皇帝像を探ったものとして興味深い。

(7) 雲夢睡虎地秦簡については、発見以来中国や日本で多くの研究が発表されている。例えば、榎山明『雲夢睡虎地秦簡』（滋賀秀三編『中国法制史―基本資料の研究―』東京大学出版会、一九九三年）には「史料解説」と詳しい「研究案内」があり、横田恭三『中国古代簡牘のすべて』（二女社、二〇一二年）には竹簡の概要のほか、一部の竹簡の写真が載せられている。さらに、松崎つね子『睡虎地秦簡』（中国古典新書統編、明德出版社、二〇〇〇年）は、秦簡のなかの「法律答問」の訳注である。また、湯浅邦弘『中国古代軍事思想史の研究』（研文出版、一九九九年）の第三部「秦の法思想と軍事思想」では、睡虎地秦簡を用いて秦の軍事制度や思想が論じられ

ている。

(8) 西嶋定生、注(5)書、二一頁。なお、西嶋氏は注(1)書において、日本と中国との関係について、邪馬台国の卑弥呼や倭の五王は中国皇帝の冊封を受け君臣関係を結んでいたが、六世紀以降は遣隋使・遣唐使も含めてこうした政治関係はなくなり、以後中国皇帝からの冊封は足利義満までなかったとして、日中の政治的関係は一貫して同じであったのではないと指摘している。

(9) 漢代の皇帝像のこうした推移については、西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会、一九八三年）六四～七八頁参照。

(さいとう みちこ・東海大学文学部特任教授)

